

内閣府青年国際交流事業の在り方検討会（第４回）

議事録

内閣府青年国際交流事業の在り方検討会（第４回）

議事次第

令和８年７月28日（火）
14：00～16：00
オンライン開催

1 開会

2 議事

- (1) 取りまとめ案について
- (2) その他

3 閉会

| | |-----| | 出席者 | |-----|

（構成員）

南島座長、梅宮構成員、中村構成員、船橋構成員、山本構成員

（内閣府）

水野政策統括官、南大臣官房審議官（青年国際交流担当室長）、牧野参事官、
伊藤国際調整官、野木参事官補佐

（オブザーバー）

白木日本青年国際交流機構会長

○南島座長 本日もお忙しい中、御参集いただき、誠にありがとうございます。

ただいまより、第4回内閣府青年国際交流事業の在り方検討会を開催いたします。冒頭、事務局より構成員の出席状況について御報告をお願いいたします。

○野木参事官補佐 本日は全構成員が御出席となっております。

内閣府からは、政策統括官の水野、大臣官房審議官・青年国際交流担当室長の南、参事官の牧野、国際調整官の伊藤が出席しております。

また、今回も関係省庁の皆様にも傍聴いただいております。

○南島座長 本日の検討会では、この検討会の取りまとめ案について、議論を行っていきたいと考えております。前回の検討会における骨子案に対する議論を踏まえまして、事務局から報告書を作成・配布していただいております。これにつきまして、冒頭からセクションごとに、順番に確認してまいりたいと考えております。なお、本日はこの検討会が最終回になりますので、最後に皆様にコメントをいただきたいと思っております。ご用意をお願いできればと思います。

それでは、「はじめに」について、事務局からご説明をお願いいたします。

○牧野参事官 事務局から御説明させていただきます。画面の方を共有しながら進めたいと思います。まず「はじめに」の部分につきまして、本検討会を開催した背景、基本的な考え方などについて記載させていただきます。

具体的な内容として、内閣府青年国際交流事業につきましては、昭和34年の事業開始以来約70年間にわたって、我が国を代表する青年育成及び国際交流事業として実施されてきたと書いています。

一方で、AIをはじめとするデジタル技術の進展、社会・国際情勢の変化、人々の交流様式の多様化等に加えて、今回、につぼん丸の引退など、この事業を取り巻く環境は大きく変わってきているということを記載しています。

こうした状況を踏まえて、本検討会においては、本事業の政策的な意義について改めて確認するとともに、船事業の在り方、事業基盤整備の方向性などについて、幅広く検討を行ったということについて記載させていただいています。

○南島座長 ありがとうございます。まずはテーマ設定というところですが、「はじめに」について何かコメントのある方いらっしゃいましたらお願いいたします。後でまた時間を取りたいと思います。

ひとまずは中身を見ていくことが重要と思いますので、一旦進めさせていただきます。

それでは、「1. 内閣府青年国際交流事業について」について、事務局からご説明をお願いいたします。

○牧野参事官 このセクションにおいては、本事業の経緯、目的、政策的意義及び今後育成すべき人材像について記載しています。

具体的な内容として、(1)については、先ほど本事業が昭和34年に開始されたと申し上げましたが、開始以降、順次発展し、現在5つの事業を実施しており、これまで多くの日本青年、外国青年が参加し、事業参加後も国際的な人的なネットワークを形成・発展させていると書いています。

(2)では、令和4年に開催された検討会との関係ということで、令和4年検討会の議論を振り返

って、本検討会との関係や位置付けについて記載させていただいております。

(3) については、本検討会における議論として、事業の目的について、次世代グローバルリーダーの育成に加えて、育成を通じた国際協調や地域の安定を支える人的ネットワークの形成と、この2つで目的を考えるべきということを今回整理させていただいております。

その上で(4)で、人材像に関するパートとして、令和4年の検討会を踏まえて、未来志向、国際・地域感覚、多様性、コラボレーション、社会貢献という5つの要素を基本として引き継ぎつつ、今回新たな観点として、能力と合わせて、行動特性という意味でのコンピテンシーという観点から5つの要素を再整理しています。このような観点から、それぞれ事業の各段階に向ける取組について考え直そうと記載しています。

○南島座長 ありがとうございます。前回の令和4年の検討会からもこの話題が出ていましたが、今度はこれを表にして整理いただいたというところが、少し新しいところでございます。コンピテンシーについては、いろんな定義の仕方があるかと思いますが、簡単に「グローバルリーダーとしてふさわしい行動を表現したもの」と見ていただければと思います。本セクションについて何かコメント等ございましたらお願いしたいと思いますが、いかがでございましょうか。よろしいですか。大きくは振り返りの要素が強いですが、徐々に本論の方に入ってまいります。

それでは続きまして、「2. 船事業の在り方の見直し」につきまして、事務局から説明をお願いします。

○牧野参事官 「2. 船事業の在り方の見直し」ですが、今回につぼん丸が引退して、クルーズ市場の構造自体も変わってきているなかで、事業環境の変化を踏まえて、船事業の中核的価値について改めて考え直して再整理するとともに、今後の実施方法や事業設計の方向性等について、御議論いただいた結果をまとめさせていただいております。

(1) は検討の背景になります。

(2) は船事業において、船という舞台装置・環境を使うことの意義を整理させていただいております。注目している主なポイントとしては、青年同士の相互作用とそれを契機とした学習・交流のプロセスが重要であるとして、その観点から5つの特性を記載しています。

以上を踏まえて、(3)で、事業の中核となる価値として、人材育成価値、ネットワーク価値、外向的価値、シンボリック価値という4つの価値を整理させていただいた上で、特に、前者2つ、人材育成価値、ネットワーク価値を船事業における中核的価値と位置付けております。

その上で(4)において、実施方法として、船を優先して考えるという前提に立った上で、船を活用した実施方法を整理しています。具体的には、船を利用する方法として、これまでのフルチャーターで実施する方法、商業クルーズを活用する方法、フェリーなどクルーズ船以外の船舶を使う方法を比較しながら、人材育成価値・ネットワーク価値の最大化を基本軸として検討を進めるべきと議論を整理させていただいております。

(5)と(6)は、船事業における中核的価値を最大化するという観点から、事業をどう見直すべきかということで、(5)においては、プログラム設計に関する問題、(6)については参加者の構

成に関する問題で、参加青年同士の相互作用というものを最大化して、その人材育成価値及びネットワーク価値を最大化するという観点から、今後こんな取組が考えられるのではないかとすることをまとめております。

○南島座長 ありがとうございます。船事業の在り方の見直しということで、主として検討会で議論してきた中身を大きく取り込んでいただいていると思います。特に、参加青年同士の対立と葛藤の経験や、そこから紡ぎ出される学習交流のプロセスのあたりは検討会での議論をしっかりと取り入れていただいたものと思っております。

4つの価値を示していただきつつ、人材育成価値とネットワーク価値を最大化することを大きなキーワードに設定をしております。

あとは、船の実施方法のパターンを比較するというのも検討会の議論でしたが、それも紹介していただいて、主として検討会での議論の中身がここに表現されていると思います。

それでは、このセクションについて、何かコメントございましたらお願いします。梅宮構成員、よろしくお願いします。

○梅宮構成員 船事業の特徴に関して、まとめていただいているとおりでと思いますが、一点、非日常性、密室性に関係し、検討会の中で特に山本構成員が強調してくださって私もそのとおりで思ってお伺いしていた点として、日中の活動の後に、船にいるからこそインフォーマルにいろんなコミュニケーションを取ることができることが有意義だとおっしゃっていたと記憶をしています。

船の非日常性、密室性の意義に関連して、飛行機で移動して夜の宿泊先はバラバラでコミュニケーションを取ることがないということとは違う環境を提供できることをもう少し強調してもいいのではないかと思います。それが船事業の意義を説明できることにつながるのかなと思いました。

○南島座長 ありがとうございます。一言で言うところ「偶発性」ということだろうと思いますが、どこに入るかということ「非日常性」が一番近いと思いますが、どう表現したらよろしいかアイデアがありましたら、梅宮構成員からもう少しご提起いただければと思います。

○梅宮構成員 この5つの中では、おっしゃっていたとおり、非日常性、密室性につながると思いましたが、どれかに紐づけるのか、もしくは、本文の中で足していただくことができるのであればそれもよいと思いました。

○牧野参事官 御指摘いただいた内容について、中身としては（5）で、プログラムの講義や施設訪問などオフィシャルなものだけではなくて、青年同士の相互作用の積み重ねによって実現されるということが事業の意味であると8ページの下のほうに書いていて、9ページでは共同生活全般を交流学習の場として捉えて、その相互作用をどう最大化していくかが事業のプログラムあるいは事業設計における重要な観点だと書いています。どこかの特性に紐づけるということで書いてはいませんが、山本先生がおっしゃっていた、事業全般をオフィシャル以外の生活も含めて、一つの学習・交流の場として捉えるというのは、ここで主に書かせていただいています。

○梅宮構成員 ありがとうございます。ここで表現しきれているようであれば、もちろんそれでも結構です。

○南島座長 山本構成員いかがですか、偶発的な、メインのプログラム以外のところで交流が深まる部分があるというところをどのようにこの報告書の中で表現するかという話になっています。

○山本構成員 ありがとうございます。おっしゃってくださったように、(5)のプログラム設計のところに包括されていると思っています。

伝わってほしいものとしては、密室の船だからこそ外部と遮断され、プログラム外の時間の余白が、学びの価値を高めるものになっていることが伝わるといいと思っているのですが、(5)のところで包括されているという認識は合ってますでしょうか。

○牧野参事官 はい。ここでおっしゃっていただいたような、共同生活全体という中で余白の部分も含めて捉えているつもりです。

○船橋構成員 違う表現や言葉をあえて入れたらいいと思います。例えば、キャリア論でブランドハップンスタンスセオリーという言葉あります。計画的偶発性という計画・偶発と矛盾した言葉の組み合わせですが、密室性、閉鎖性という空間や時間という余白という意図的に設計(計画)されたことから生まれる偶発性等のようなニュアンスなのではないかと思います。つまり、空間と余白時間を設計することで、あえて意図的に計画されているけれども、偶発的であるみたいなことです。そのぐらい書かないと、違う解釈に普通に捉えられると思います。

○南島座長 この点は、今この場での文言調整ではなくて、一旦預からせていただいて、今出していただいたキーワードをおさらいしておきます。「計画的偶発性」、「プログラム外の余白の時間」、「学びの価値の相乗効果」というキーワードを出していただきましたが、それを含めてもう少し書き足せるのかどうか、一旦事務局で預からせていただいてよろしいでしょうか。

○白木オブザーバー 「セレンディピティ」という言葉をよく船の中では使っていました。参加青年の間では、この船旅が人生の中でかけがえのない機会であるという価値を共有しており、それぞれの人生の交差点となる場を作っていると思っています。この船にける思いがあるからこそ、世界中から集まってきた青年が、この人生で1回しかない機会をより有意義なものにしようと、船内という独立した空間の中で1か月交流するということが重要と思っております。また、単にこういった空間に青年を集めればよいということではなく、この機会を特別なものとして事業として仕立てていく中で、その貴重性があるからこそ生まれる偶発的な交流や学びの価値があると思います。既参加青年は「ライフチェンジング・エクスペリエンス」とよく呼びますが、参加者にとってその後の人生に影響を与えるような、かけがえのない原体験になり得ることが、船事業の中核的な価値だと思いました。

○南島座長 追加されたキーワードとして、「セレンディピティ」、「人生の交差点」、「ライフチェンジング・エクスペリエンス」とだいぶ増えてまいりますけれども、とりあえずお預かりをして、センテンスメイクできるかどうか検討させていただければと思います。

○中村構成員 参加青年として具体的な例を出すと、夜に参加青年たちが洗濯しながら語り合うなど、ナショナルリーダーとしてナイトパトロールをした際には青年たちは見えないところで国際交流しているのを見かけました。そういった日々の船での生活をご参考までに共有しておきます。高尚な言葉にまとめてしまうと、そういうことは伝わらないと思って発言させていただきました。

○南島座長 ありがとうございます。イメージを広げるために、文章を作るときに参考にさせていただきたいと思います。

そうしましたら、一旦先に進ませていただきます。「3. 事業目的の実現に向けた取組」について、事務局から御説明をお願いします。

○牧野参事官 この部分につきましては、船事業以外の事業も含めた青年国際交流事業全体について、事業目的を実現するために、今後どういうことを注力していくべきかという事項を整理させていただいています。（1）の部分は基本的考え方として、総論的にどういう考え方で事業全体を捉えるのかということを書かせていただいています。この事業を一連の人材循環システムをとして捉えるべきだということで、青年が事業に参加することで、経験やネットワークを得て、それをさらに事業後も継続して発展させて、社会に還元させていく、還元する過程でさらに次世代へと引き継がれていく、という意味で循環システムと定義させていただいています。

その上で、人材を循環させるシステムを前提として、募集選考、事業実施、事後活動の局面において、どういうことに今後取り組んでいくべきかということを（2）以降においてそれぞれ書いています。例えば、（2）の募集選考でいえば、戦略的に多様な人材を確保するためにはどうしたらよいか、（3）の事業実施においては、対話・協働を中心とするプログラムに移行していくべきではないかと記載しています。（4）が事後活動ということで、本事業への既参加青年の活用を発展・資産化していくのか、事業の組み立ても考えていくといったことなどを書かせていただいております。

○南島座長 ありがとうございます。新しいフレームとして出していただいているのが、「人材循環システム」であり、「人材育成」、「ネットワーク形成」、「社会還元」の三角形の循環モデルです。

令和4年の報告書での「募集選考段階」、「事業実施段階」、「事後活動段階」を組み合わせ、この検討会での議論を吸収する形で再整理をしていただいた内容です。それでは、このセクションにコメント等ございましたらお願いいたします。

○山本構成員 ありがとうございます。事業実施段階における取組の現状と課題の部分について、文章に追加ができればと思いました。「社会人の参加拡大を図るためには、行政機関、企業等への働きかけを行うことはもちろん、社会人が参加しやすい実施環境の整備や社会人にとって魅力あるプログラム及びテーマの設定や所属先のニーズに合致したプログラム提供について、一層の検討を行う余地がある」と書いてありますが、ここに関して、議論していた内容を振り返ると、プログラムの内容自体を大幅に魅力的に変えないといけないという話ではなくて、どういう風な座組で企業や社会人を取り込む設計ができるかが社会人参加拡大につながっていくポイントだと思うので、行政機関、企業等へ働きかけを行うという言葉だとちょっと伝わりづらいと思いますが、いかがでしょうか。

○牧野参事官 その部分について、行政機関等や企業への働きかけは募集選考段階における取組でも書かせていただいた上で、その事業実施における環境整備という観点で、社会人の参画拡大のためにどういうことがあり得るのかということはこの部分では書いています。おっしゃっていただいたとおり、社会人や社会人が所属する企業等にとって、このプログラムが、求めているものか、魅力的に感じるかというところを踏まえて、事業設計等を考える必要があるということで、座組というのも踏ま

えて、そういったニュアンスも含めて書きましたが、あまり明確ではないというか、プログラム内容の部分に直接的に見えてしまうかもしれないとは思いました。

○南島座長 山本構成員がおっしゃっているのは、プログラム内容ではなくて「座組だ」というお話だと思います。そのイメージの違いについて、山本構成員からもう少しこうではないかということをおっしゃっていただくことは可能でしょうか。

○山本構成員 ありがとうございます。おっしゃってくださったところは、魅力あるプログラムのテーマ設定とか、ニーズに合致したプログラム提供について一層の検討をするということ以上に、企業や行政機関の人材育成のアジェンダに本事業をどう乗せていくかが重要だと思います。そうした観点で連携の枠組みがうまく構築できれば、人事部門等の理解を得て、企業や行政機関の費用で人材を派遣することも可能になると思っているので、そこが強調される文章になったら嬉しいです。行政機関、企業への働きかけを行う、の一言では、端的すぎて伝わりづらいと思っています。

○南島座長 企業や行政機関側の人材育成ニーズをもっと捉えていく必要があるということで、社会人が個人として参加するというよりも、企業側、行政機関、組織ニーズの方を捕まえるというニュアンスがもっと出るようにした方がいいということですね。

○牧野参事官 他の部分も含めて、現状と課題ということで、今こんなことが足りていないとか、こういうことがさらに求められているということを書かせていただいていて、具体的にどんなことをやるのかというところは、今後の事項として書かせていただいています。

社会人の参画拡大というところで、企業との連携強化、あるいは参加環境の整備ということで、人材育成の機会として認知してもらって活用してもらえような形でこの事業の事業環境を整備していくことが重要だと書かせていただいています。

○南島座長 ちょっと離れたところにあるので、わかりにくかったかもしれません。取り組むべき事項に書いているので、強調されていると思いますが、山本構成員いかがでしょうか。

○山本構成員 書いてある内容はこれで間違いなく正しく書かれていると思いますが、今お伝えしたニュアンスの正しい伝わり方をするのが気になったので、もし船橋構成員の方で良い案をお持ちであれば、御提案してほしいです。

○船橋構成員 私と山本構成員の理解は、プログラムの質は既に十分なレベルであります。おそらく、言葉の定義としてプログラムという文言ではなく、例えば企業におけるインセンティブという文言・表現のような意味合いでしょうか？この辺りを区別し、明確にする必要がある、ということだと思っています。

既存文章ですと、整備するという文言で表現されていますが、整備＝なにかを新たに作らなくてはならないように解釈されてしまいます。しかしながら、もうすでに実は企業にとって連携の価値は存在しています。つまり、整備されています。ただし、その点を区別したことも、表現したことも、企業に依頼したことも、明らかにすればいいというニュアンスなのではないかと思っています。

既存の文章では、プログラム内容が足りないと読めてしまい、これから考えていかななくてはならないというニュアンスが強すぎると思います。現状でも充分価値があるので、その点は精緻に表現した

上で企業に連携を打診していくという感じではないでしょうか。

○山本構成員 はい。プログラムを変更する、議論をするという形ではなく、届け方や、お互いの合致ポイントを見つけて、連携を深くする。私は座組作りと表現しましたが、そのようなニュアンスが伝わると思います。

○南島座長 ありがとうございます。現状と課題では課題感をもっと出していくが、プログラム自体には課題は小さくなく、課題が大きいのは、企業におけるインセンティブの表現の仕方であるということですね。あとは、キーワードとして、「お互いの合致ポイント」、「座組」、このあたりということかなと思います。

○船橋構成員 この点の課題があるというのは、むしろ、伸びしろ＝新たな可能性という側面もありますので、少しポジティブな言葉を使っていくといいかもしれません。

○南島座長 もうちょっと強調されるように、課題のところにも表現するということだと思います。

○白木オブザーバー 事後活動部分について、現状と課題に関しては、まさにこのとおりだと思います。

今後取り組むべき事項の中に1つ入れていただきたいこととして、海外の既参加青年たちのネットワークの実践的な活用というのが、これからの鍵になるのではないかと考えています。

多世代に渡って60年の積み重ねがあるということと、海外に沢山の同窓生がいることが、他の国の事業と比べても非常に特色のある点だと思っています。

オンラインを使って、テーマ性に即したグローバルカンファレンスを開催するとか、各分野で指導的立場にある既参加青年等との交流や協働の機会を意図的に組み込み、既参加青年ネットワークを人材育成やキャリア形成にも活用できる仕組みとしていくことで、海外の既参加青年も含めたネットワークの価値を最大化できるのではないかと考えています。このあたりをぜひ提言として1つ残したいです。

あともう1つは、循環モデルを採用していただいている中で、事後活動とはどういうものなのか、具体的にどのような活動が期待されているのかについて、内閣府において募集段階から一定の方向性をお示しいただきたいです。特に、事業参加直後の数年間において、内閣府や事後活動組織と共に事業を支える活動に参画できるような入口を、オンボーディングで用意しておくことが重要だと思います。事後活動を全て参加青年の主体性に委ねるだけでは、今後事後活動組織や事業運営を支える基盤も先細っていくおそれがあります。

このあたりは前3回の検討会の議論の中でも少し出ていたと思いますし、船橋構成員から御紹介いただいたトビタテの事例も含めて、様々な御提案があったとっておりますので、取り組むべき事項としては、その2点を入れていただけると嬉しいと思っております。

○南島座長 ありがとうございます。抽象的には反映させられそうだと思いますが、まずは海外ネットワークの活用の課題は出し得ると思います。その後のところをどこまで具体的に書くのかということとはちょっと調整も必要かもしれませんので、一旦そこはお預かりをさせていただきます。2点目の募集の段階からというところも、事後活動ではなくて、もっと前に書かないといけないことと思いま

すが、そこも調整ということになるかと思います。事後活動との関係で募集の段階でむしろ強調されたいという御趣旨でしょうか。

○白木オブザーバー 募集と、プログラム参加中、事後活動を一体的に設計するとともに、内閣府として事後活動や事後活動組織の位置付けを定義した上で、参加青年が参画できる受け皿を作るというのが肝要であるという趣旨で発言をさせていただきました。現状では、参加者それぞれが自主性に基づいて行う活動を幅広く事後活動と定義しており、その中でも国際交流に特に思いがある人が寄港地活動などの内閣府事業の支援に継続的に関わっている状況だと思います。しかし、そのような活動に関わるのは一部の意欲の高い青年に限られており、全体で見ると2～3割程度に留まっているのが実態ではないかと思います。そのため、事後活動への参画を個人の自主性だけに委ねるのではなく、参加後に内閣府事業や事後活動組織と関わることでできる明確な受け皿や導線を用意することが重要だと思います。そうした仕組みがあれば、より多くの参加青年が事後活動に関わるようになり、事業を支える担い手の裾野も広がりますし、「事業に参加した後はこうした形で関わっていくものだ」という意識を自然に醸成することにもつながるのではないかと考えております。

○南島座長 今のご発言は、もしかすると、この後に御説明いただく人的基盤の強化のところで触れている話かとも思いますので、またそこを聞いていただいて、コメントをいただきたいと思います。事務局でレスポンスがありましたらお願いいたします。

○牧野参事官 総論的には10ページの（１）の基本的考え方で、募集選考、事業実施及び事後活動を、独立した取組として捉えるのではなくて、相互に関連したプロセスとして捉えた上で一体的に運用される必要があるとして、事後活動に引きつけて書いているというよりは、それぞれを関連させていくという意味で書いています。

受け皿というところまでは書いていないですが、募集選考の時点から事後活動まで、あるいは事業実施の時点で事後活動も視野に入れてというところは、ここで総論的に入っていると思っています。

海外のネットワークについては、問題意識の光の当て方がずれている部分があるかもしれませんが、報告書では、まずは活動事例、情報の共有、ネットワークの可視化といった具体的にどういうネットワークがあるかをしっかり把握することが重要で、その上で、それをどう支えていくかということで書かせていただいており、意図としては、まずはその海外の事例も含めて、どういう人がどんな活動をしているのか、どんなネットワークがあるのかをしっかりと明らかにしていくことが、まず今のフェイズとしては重要ではないかというニュアンスがあります。

○南島座長 はい、ありがとうございます。そうしましたら、先に進みまして、「４．持続性向上のための基盤整備」の御説明をお願いいたします。

○牧野参事官 「４．持続性向上のための基盤整備」という部分について御説明します。先ほどの「３．事業目的を実現するための取組」を含めて、この事業を将来にわたって、安定的かつ持続的に実施していくためには、どういうことを取り組んでいくことが必要かという観点で、そのための基盤整備をどのように考えるかという、その方向性について整理させていただいたものになります。

これも同様に（１）で基本的な考え方を整理しておりますが、特にこの事業の持続性向上に向けた

基本的な考え方として、財政基盤、人的基盤、ネットワーク基盤、情報基盤の4つがこの事業を支える基盤として重要なのではないかと整理させていただきました。その上で、(2)以降では、今申し上げた4つの基盤について、それぞれどんな形でその基盤の強化を図っていくことが必要かという方向性を、それぞれ(2)以降に書かせていただいています。例えば、財政的な観点で申し上げると、基本的には国費を基本とした安定的な事業実施を前提としながら、参加青年や外国政府、民間の企業等との連携を強化する形での人的ネットワークといった既参加青年のネットワークの維持・発展について(3)に書いています。(4)では同様にそれ以外の部分も含めてネットワーク基盤について書いています。(5)では、情報の基盤ということで、その成果の可視化や、情報発信の充実、その前提としての既参加青年情報も含めて、情報をきちんと整理するという事で、データベースの整理と書いてあります。これについて、既参加青年や事後活動組織等と連携して進めるということを書かせていただいています。

○南島座長 ありがとうございます。4つの基盤整備として、令和4年の報告書においては「事業強化の視点」を言っていましたが、今回は「事業基盤の強化」ということで、基盤に目を向けて、「財政基盤」、「人的基盤」、「ネットワーク基盤」、「情報基盤」を取り上げて、特にそこにコミットメントするような提言を出していくという整理の仕方をしていただきました。こちらにつきまして、この検討会での議論を吸収していただいている部分とっていますが、過不足も含めまして、コメント等をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○梅宮構成員 質問ですが、財政基盤の強化の中に、「既参加青年が参画する高度な研修やネットワーク形成プログラム等について、その収益や知見を事業へ還元する仕組みについても検討に値する」とありますが、具体的にはどんなことを想定していますでしょうか。

○牧野参事官 具体的に念頭において考えていたのは第1回の検討会の議論で、既参加青年が費用を払って船に乗って滞在しながら研修を実施するということもあり得るのではないかという話がありました。収益という言い方が適切かどうかという点ではありますが、既参加青年が一定費用を払いながら事業に参加して、費用面以外にも、その知見やネットワークを参加青年に対して提供するようなプログラムという意味での、財政面での強化もあり得るのではないかという趣旨です。

○梅宮構成員 中村先生がお話くださったこと覚えております。高度な研修ということで表現されているということですね。分かりました。

○南島座長 御指摘いただいたので、もうちょっとわかりやすくなるようにお預かりをさせていただこうと思います。先ほど、白木オブザーバーに御発言いただきましたけれど、改めていかがでしょう。

○白木オブザーバー 議論の中でトビタテさんの事例にもあったネットワーク基盤におけるコミュニティマネジメントのような、ただネットワークがあるというだけではなく、そのネットワークを活用するための施策に、ちゃんと人や予算を配置していくことも肝要と思いました。

やっぱり、事後活動組織が任意団体ボランティアの壁を超えられないのは、どうしてもそこに職業として耕し続ける人がいないという課題があると思います。それは内閣府の機能なのか、受託事業者の機能なのか、事後活動組織の機能なのかというのは、議論があるとは思いますが、ネットワークを

ちゃんと活用できる状態で置いておくことが今の課題に対する具体的な施策として必要と感じたところでございます。

このあたりは船橋構成員から御指摘があれば、ぜひ聞いてみたいと思っていたところです。

○船橋構成員 トビタテの場合はそもそも留学促進事業という位置付けだったので、人的ネットワークを組成・維持するためのコミュニティーマネジメントに対して、当初は人材も資金も充てられていないところからスタートしました。

しかし、このコミュニティーの価値の重要性を問い続け、かつ、徐々に可視化し続けた結果、資金（予算）も人的リソースも付けられるようになったという経緯があります。一方、こちらの事業はそもそも国際交流であり、コミュニティー・人的ネットワークは大事であるとしている以上、白木オブザーバーがおっしゃるように、資金や人的リソースもきちんと充てるべきです。現在のようなアルムナイの方々のボランティアに依存することなく、戦略的にリソース配分をすることを願います。

○牧野参事官 白木オブザーバーからお話があったとおり、我々としてもネットワークの整備や、事業を通じて形成された後も発展し続けるネットワークは事業の重要な価値の1つだろうと思っています。

そのために、内閣府や事後活動組織がそれぞれどういう役割を果たして、連携してやっていけるのかということかと思っています。今の話で、（3）において、既参加青年、事後活動組織がどういう役割を果たすことが期待されるのかを抽象的に言った上で、最後に、内閣府の役割としては、制度設計や全体統括というところでの主体であるということと、関係者がきちんと連携できるようなコーディネーター的な役割が必要ではないかということを書いています。そこからさらに予算や人だとかも視野に入れながら書いているつもりです。その意味では、何か具体的な事業が書いてあるわけではないので、わかりにくい部分があるとは思いますが。

○南島座長 趣旨の共有はできていますが、具体的なところまでは踏み込んでないという御説明かと思いますが、他方で、白木オブザーバーから御指摘いただいて、もう少し踏み込めないかというところが大事ではないか思います。ここは調整をしないといけないところにもなると思います。

それでは、「おわりに」に触れていただいて、全体の話にしたいと思います。事務局からの御説明をお願いいたします。

○牧野参事官 「おわりに」という部分について説明をさせていただきます。この部分につきましては、本検討会における議論の総括と今後への期待ということを記載しています。具体的には、その社会や国際環境が変化する中にあったとしても、この事業の本質である、青年同士が対話して信頼関係を築く機会の重要性が高まっていくと書いています。

そういった環境を前提として、内閣府をはじめとする関係機関が連携しながら、本検討会の提言を具体化して、この事業をさらに発展させていくことを求めたいとして、内閣府においてはこの事業のさらなる発展を期待するといったことを書かせていただいています。

以上のような、最後のまとめの部分を踏まえまして、報告書のタイトルは冒頭にありますが、内閣府青年国際交流事業の在り方検討会報告書ということで、副題的に内閣府青年国際交流事業の持続的発

展に向けた提言ということで置かせていただいています。おわりにとタイトルの説明は以上になります。

○南島座長 これで一通り全体を見ていただきました。あくまで、事業主体は内閣府であり、内閣府に何を求めるのかということで、この報告書が書いていることを明確にさせていただいています。あとは、事業に対する期待ということで、タイトルにそれを引っ張っていただいております。さて、おわりにまたは全体を通じて何かコメントございましたらお願いいたしますと思いますが、いかがでしょうか。概ねこの検討会の議論をまとめていただいた形にはなっていると思います。若干足りないところもあるという指摘をいくつかいただいたところですが、いかがでしょうか。では、船橋構成員お願いいたします。

○船橋構成員 内閣府へ求めるものという意味では、私は当初から一貫して申し上げている通り、そもそものこの事業の目的をもう少し見直すべきではないかということです。平和構築や予防外交が非常に重要になってくるのではないかと思います。税金を使う以上は、これからのご時世においてもそうであるべきと思っています。例えば、財源が税金ではなくて、全部アルムナイの寄付で賄うのであれば、国際交流だけでもいいのではないかと思うところもありますが。

トビタテのようなプログラムが出てきた時に比較されると、国際交流事業、人材育成事業は他でもやっているとなるので、より強力かつ差別化した目的、そしてそこに伴う価値を付随していくことが、最重要な総括の在り方でないかと実は思っています。既存のプログラムの見直しに論点を置くレベルですと、本日ご提案のあった報告書（素案）レベルで十分議論されたのでいいと思っています。その上で、どれだけより強力な目的への深化・進化する部分を盛り込んでいくのか。中身＝プログラムは今の延長線上の軽いブラッシュアップで良いと思いますが、包み紙を変えないとまずいのではないかなというのが私の一番の認識であり主張です。

加えて、財源は国だけに頼らず、アルムナイも総出で、他の国からも出してもらうよう働きかけをする、自分たちも拠出するという点もやっていかないといけないのではないかなという危機意識があります。

いずれにしても、既存事業については高い評価をしています、危機意識がある部分のバランスがもっと反映されるといいと思っております。

○南島座長 ありがとうございます。貴重な御意見でございます。中村構成員、お願いいたします。

○中村構成員 今、船橋構成員がおっしゃられたことに強く賛同しているので、ここで発言しておこうと思います。私自身も長くこの事業に関わってきて、もともと「東南アジア青年の船」事業が始まった時は、東南アジア諸国に当時の田中角栄首相が訪問して、ものすごくジャパンバッシングを受けたということがあったはずで。そういった当時の状況を受けて、青年の国際交流が必要だということで長くやってきていて、当時と今とを比較すると、個々のレベルでの友情が育まれ実際にファミリーになってしまった人たちも結構いるので、まさに平和構築、予防外交に土台の上で貢献してきている事業だということは肌感覚を持って感じています。

なので、一人一人の青年の育成や能力の開発といったことよりも、私は船橋構成員がおっしゃった

ことに深く賛同しています。なので、そこをどううまく表現していくかはなかなか難しいところはあると思いますが、本当にそのとおりだと思ったので、発言させていただきました。以上です。

○南島座長 ありがとうございます。今出していただいている論点について、他に御発言ございますでしょうか。白木オブザーバーお願いいたします。

○白木オブザーバー 事業の在り方そのものについては、この検討会で十分に議論できたと思っています。一方で、重要なのは、ここで議論した内容をどのように具体的な取組にどう落とし込んで、現場で実際に機能するものにしていくかだと思っています。その際、年度単位で担当者が変わったり、予算も毎年折衝したりという制約を超えて、本当に良いプログラムを作り、良い事後活動のネットワークを形成し、それがまた次の世代へと循環していく仕組みを実現できるかが重要だと感じています。そのためには、この検討会で示された方向性について、関係者とともに作り込んでいくとともに、複数年かけて継続的に検証・見直しを行うことが肝要だと全4回参加して思いました。

当然、事後活動組織としても、在り方検討会で出た議論は我々の活動に落とし込みたいとは思いますが、そういったことをステークホルダーとしっかりと密に重ねる機会を今後も継続的に持つていくといったことを提言として載せていただければいいと思いました。

検討会の提言の内容を実行力を持って実施していくことが肝要という意見でございました。

○南島座長 ありがとうございます。今、話題に出していただきました平和構築・予防外交については2ページに書かれています。「このような観点から、本検討会では、本事業の目的を「次世代グローバル・リーダーの育成」及びそれを通じた「国際協調や地域の安定を支える人的ネットワークの形成」とし、本事業を将来の国際協調や地域の安定に資する戦略的投資と位置付けることが確認された。」という書き方をしています。他のところにも似たような記述があると思いますが、これではちょっとおそらくは弱いということだと思います。もっと強調できないかということだと思っておりますが、この段階ではとりあえずお預かりしたいと思っておりますので、事務局から何かレスポンスがあればお願いいたします。

○牧野参事官 今、南島座長からお話があったとおり、検討会の方で御議論いただいていた平和構築・予防外交、あるいは草の根外交といったそういう観点を、ここで国際協調、地域の安定ということが平和ともつながったネットワークというところにまとめさせていただきました。

表現がわかりにくいというものがあれば、もう少し考えたいと思います。

○南島座長 強調したいというコメントもいただいたと思いますので、例えば、もっと前の方に持ってくるだけでも、見え方は変わってくるでしょうし、平和構築・予防外交に踏み込んで記述するかどうかは調整が必要かもしれません。いずれにしても、その配置を変えるだけでも強調できる場所もあると思いますので、それも含めて、一旦ここでお預かりをしたいと思います。

それから2点目の現場にどうやって落としていくのか、関係者とともにどうやって作り上げていくっていうことを表現するのかを書いていただいていると思いますが、おそらくは白木オブザーバーの御指摘はもっと踏み込んでということだと思います。この点については事務局のレスポンスございますか。

○牧野参事官 先ほど最後に御説明させていただいた「おわりに」の最後の段落のところで、「内閣

府においては、各国政府、事後活動組織その他の関係機関と連携し、本報告書の提言を具体化することを求めたい」ということで、白木オブザーバーから、先ほどステークホルダーと今後も連携しながら議論していくことが必要だという話で、この報告書をどうやって実施していくのかというところも、議論していくべきだという話は、ここに入っていると思っています。

○南島座長 ありがとうございます。本検討会が内閣府に対して求めることを、最後の段階で、期待とともに語っているということで、ここで一定の強調がされていると思いますが、白木オブザーバーいかがでしょうか。

○白木オブザーバー ここは表現の問題だと思います。すでに内閣府と事後活動組織は、定期的に意見交換を行い、踏み込んでプログラムも作っています。ナショナルリーダーや副団長といった要になるような人材を我々から推薦しているというところでは、募集選考段階、事業実施段階、事後活動段階で連携はしているということが事実だとは思っています。

しかしながら、今の局面においては、例えば、連携をしているということ以上に踏み込まないと、今後の船事業を残して継続・発展するのは難しいのではないかという課題感もあります。

例えば、共通の戦略を描いた上で、中長期の計画や戦略をしっかりとお互いが握り合うみたいなどころの中に役割分担をすることが重要と思っていましたので、さらに踏み込めればいいと思いました。

表現としては入れていただいていると思っております。ありがとうございます。

○南島座長 一方で、内閣府の人事異動があるということと、財務省がいるということは、なかなか越えられない壁があると思います。他方で、白木オブザーバーは現場の熱量を落とすような形にはしてほしくないということをおっしゃっているのだらうと思いますので、それを文言としてどう表現するかの問題です。どうでしょうか。いいアイデア何かございますか。

○中村構成員 文言ではないです。ただ、実際に船の事業が終わる前のプログラムの中で、参加青年が一番やる気になっています。最後までに、何か事後活動の何らかの選挙をすとか、そういったことを今はやっているのでしょうか。

実は、私は民間の日米学生会議に参加して、実行委員もやったことがあります、例えば、その1か月の会議の終わりまでに、翌年の委員を選抜する選挙をやります。そうすると、必ず選挙で選ばれた日米それぞれの青年たちが次の回の準備に従事するというのが何十年にもわたって続いてきています。それに対して、内閣府事業で、少なくとも「東南アジア青年の船」事業と「世界青年の船」事業とでは、そういった仕組みをうまく取り入れることができないかと思います。内閣府事業では同一の者が複数回参加できないことになっているので、例えば、受け入れで積極的な役割を果たすなど何かそういった仕組みを用意することによってある程度船に参加している間に、少なくとも1年間は何らかの責任を果たすという仕組みがすでにあればいいですが、もしまだ十分に機能してないのであれば、そういった仕組みを検討することによって、内閣府と連携して動くグループを作り上げることはできるのではないかと、質問も含めて意見を述べさせていただきました。以上です。

○南島座長 質問の側面もあるということでございますが、事務局いかがでしょうか、プログラムが終わるまでにネットワーク維持のための仕組みがあるのかないのか、あるいはこれをやったほうがいい

いのではないか。こういうご意見です。

○牧野参事官 「世界青年の船」事業と「東南アジア青年の船」事業で若干違う部分がありますが、例えば、「東南アジア青年の船」事業では、最後の方の局面になると、各国の同窓会組織の代表が乗ってきて、それぞれの国における事後活動についてのレクチャーや手ほどきみたいなものをそれぞれの国の代表団に対して行うという形をとっています。その中で、そのそもそもどういことが事後活動としてあるのかという話だったり、今後、今回の参加青年たちはどういことをやるかだたりを考えていただくという時間をとっています。

「世界青年の船」事業は毎回すべての参加国から代表として過去のOBが乗ってくるという形にはなっていないので、一部の国に限ってという形でやっています。その中で、今後、我々は何をしていくのか、どうい事後活動をやるのかを考えていただくことをやっています。

他方で、次回の受け入れをどうするか、事後活動組織全般をどうするかという話には必ずしもなっておらず、自分たちの活動としてどういことをやるのかをまとめてもらっているという形です。

事後活動組織全体と連携の仕方は、それぞれ各国の乗ってくる代表者の方に委ねられているので、どういふうにつながっていくかはそれぞれの国ごとに考えてもらっています。

○南島座長 そうしますと、先ほどの文言ですが、内閣府においては事後活動組織等との関係機関と連携することを求めていくという書き方をしているので、その範囲の中で、踏み込んだ検討をいただきたいという話になると思います。

○中村構成員 ありがとうございます。少しでも具体的に踏み込んでいただくことによって、参加青年側も、国の事業だからと思わないで、もう少し自分事にできるといいと思います。

私自身、大学4年生の時参加しましたが、すぐ留学することが決まっており、国の事業だからそこまで自分が前のめりにならなくてもいいぐらいの意識だったと思います。なので、そのあたりをうまく取り込んでいけるような仕組みができると、IYEOとの連携という意味でもいいのではないかと思います。

○南島座長 ありがとうございます。極めて重要な御指摘をいただいたと思います。確におっしゃるとおり、国の事業ですと、おんぶに抱っこというふうに参加する人がいかなないです。それを主体的な活動に転換させていくという転換過程が必要だということは、非常に大事な御指摘と思います。

○中村構成員 何らかの責任を負って肩書きを持つことにより、おんぶに抱っこ状態から、自分もその一翼を担うという意識に転換するので、その仕組みがあるといいと感じました。

○南島座長 はい。この点に関しては、船橋構成員はしっかり考えていただいた上で、トビタテの事業にも御協力をいただいていたと思いますけれども、同じようなご意見をお持ちではないかと思っておりますが、何かコメントございますか。

○船橋構成員 全く異論ございません。

○南島座長 国際交流のお話で、どうやって主体性を持たせるかということは、御経験も豊富な梅宮構成員も御意見がありそうな印象を持っておりますが、いかがでしょうか。

○梅宮構成員 先ほどおっしゃっていた肩書きや立場をお渡しするというのは有効だと思います。抽

象的に、主体的に何かやってくださいというメッセージだけでは、時間とともに責任感が薄れてしまうというのはよくあることだと思います。

例えば、本学でも、UNDPの学生アンバサダーとなって活動している学生が複数人いますが、積極的に自分たちでUNDPと協力しながらいろんなイベントを企画したりしています。同様に、肩書や立場をお渡しして、役割とともに活動を期待するというのは有効な手段ではないかと思いました。

○南島座長 お話が盛り上がってまいりましたので、山本構成員もご発言いかがでしょうか。

○山本構成員 ちょっと話が変わりますが、このプログラムの意義として、船橋さんがおっしゃってくださっていたところをどう伝えられるのかを考えていました。2ページ目の(3)の意義のところに、ネットワークという言葉がたくさん出てきているので、ネットワークの形成が主目的に受け取られる懸念があります。国だからこそやらなきゃいけないこととして、ネットワークだけじゃなくて、首相が変わったり、国の政策が変わったとしても、このプログラムに参加した人たちが世界平和をリードして作っていくための基盤を築くことがあると思います。

ネットワークの形成自体を強調するより、目的として世界平和の実現のために必要な人材を育成して、その人材同士のネットワークが平和な国際社会の形成につながっていく、という文脈が伝わる方がいいと思いました。

また、「おわりに」を改めて読んでいて、2段落目の「しかし、環境の変化への適応は、本事業の本質の変化を意味しない。むしろ、多様な背景を持つ青年が国境を越えて出会い、対話し、協働し、長期的な信頼関係を築くことのできる機会の重要性は、一層高まっていくものと考えられる。」の部分についても、信頼関係を築くこと自体が目的ではなく、その先にあるもう一段上の目的が伝わる方がいいと思います。

「はじめに」と「おわりに」についても、国際協力や交流を行う場という位置付けに留まらず、もう少し強く日本がリードをして、予防外交や世界平和の実現に貢献していくための場なのだとところが伝わる文章になると良いと思ったので、共有します。

○中村構成員 私も山本構成員に乘せる形で発言させていただいても良いでしょうか。

私はどうしても「東南アジア青年の船」事業に引っ張られてしまいましたが、山本構成員の話を聞いて、やっぱり船事業は、みんなで世界を平和にしようという理念を中心に据えているプログラムだと非常に深く伝わってきました。

それはすごく大切なことで、「世界青年の船」事業、「東南アジア青年の船」事業、航空機事業を一緒に話してしまうと、突然世界平和と言われてもというような感じはあると思いますが、やっぱりこの事業は、青年が世界平和にいかに関与できるかという中核的価値に向けて、それぞれのプログラムでアプローチしていると考えていいと思います。

日本の青年たちが、みんなで心から、自分たちは世界の平和のために何ができるだろうと考えることを中核的な価値としながら、「世界青年の船」事業・「東南アジア青年の船」事業での地域の安定というアプローチや、日本が世界の平和に貢献できる国でありたいという、特に日本国憲法に書かれている精神に基づいて、一步を踏み出す場であると考えてよいと思います。

山本構成員の意見を聞いて、自分の中で鮮明になったので、あえて発言させていただきました。

○牧野参事官 令和4年度の検討会においては、グローバルリーダーの育成が中心で目的を整理しているということだったと思っています。今回の検討会における議論を踏まえて、育成されるべきリーダーたちがネットワークを形成していくという中で、平和構築・予防外交といった国際協調に起因するネットワークとして機能していくことも1つの目的として重要なのではないかと今回整理させていただいています。

○南島座長 いずれにしても、御指摘いただいている論点は、これまでの説明との整合性を踏まえて一旦お預かりをさせていただければと思っております。ある程度ご意見の方は出尽くしたでしょうか。

そうしましたら、いくつかお預かりするべきお話が出てまいりました。平和構築・予防外交を目的として打ち出すべきだというご意見もいただきました。それから、現場にどうやって落とししていくのか、もう一步、現場サイドに踏み込んだ記述はありえないかという御指摘もいただいたところです。本文で言いますと、9ページ前後のところでいくつかのキーワードたくさんいただきました。計画的偶発性ということに象徴されるようなお話は、キーワードを使いながら文章を起こすということになりますと、一旦ここはお預かりをさせていただきたいと申し上げたところです。13ページのあたりですね。ここでも御指摘をいただいております。プログラムとしては十分けれども、企業においてのインセンティブをもっと表現できないかということで、企業側の人材育成のニーズがあるということをお指摘いただきましたので、ここも文章を少し変えていく必要があると思っております。白木オブザーバーからいただいていた海外ネットワークの活用と課題に踏み込めという御指摘もいただきました。これも検討させていただきたいと思います。あとは、プログラムが終わるまでにネットワーク維持のための仕組みをもっと具体的に書けないかという御指摘をいただいたと思います。

こうしたところを修文させていただきまして、皆様にお示しをいたします。それで確定にしていきたいというふうに思います。

白木オブザーバー含めたこの検討会のメンバーで議論したことを表現する、内閣府に提言するということがこの報告書の建付けになりますので、その意識でまた見ていただければと思っております。

最後に、4回の検討会、お付き合いいただきありがとうございました。貴重なご意見をたくさん頂戴いたしました。構成員とオブザーバー含めまして、皆様から、言い残したこと、感想、今後の事業への期待などについて、一言ずつコメントをいただければと思っております。順番を申し上げます。船橋構成員、中村構成員、梅宮構成員、山本構成員、白木オブザーバーという順番で一言ずつお願いできればと思います。船橋構成員からよろしく願いいたします。

○船橋構成員 皆さん4回お疲れ様でした。ありがとうございました。個人的には伝えたいことは全て意見として出したつもりです。ただし、大変失礼な発言とか物言いがあったような気はしています。事業の存続・発展を願うからこそその発言ですとその点はどうぞお許しいただけたらと思っています。

課題や方向性、問題意識は構成員の皆さんと内閣府の皆さんと共有できたのではないかと考えております。改めて最後に今一度お願いですが、より強力な事業への深化・進化を目指し、事業目的として平和構築・予防外交を全面的に書いていただきたいと思います。

無論、皆さんから異論がなければですが、今でも十分なものの、もう数段価値が増します。これからの時代必要ですという言い方で書いていただかないと、グローバル人材育成、国際交流が主で収まると、他との差別化、優位性を問われます。さらに価値が増大しますという書きぶりにしていただくとありがたいです。白木さん含めここにいる皆さんと、事業を中長期に存続させようとするならば、こういう意義があると報告書をまとめたって言うのと言えるか言えないかで違う気がするので、そこはやはり最も最重要ではないかと、今の最後の最後でもやっぱり思います。

そこが一番の論点ではなかったので議論をし尽くさなかったですが、そこを外すと何となくの良い事業だが、費用対効果、他者比較で削減対象になり、いずれ終わってしまう気がします。いずれにしても、本当にありがとうございました。

○中村構成員 私も前回の検討会でそのことは話しましたが、船橋構成員のような強力な発言をしてくださる方がいなかったのも、そこまで強調できなかったという思いがありました。なので、今回は船橋構成員のおかげで、そこを自分の中で意識をより明確にできました。特に、今、世界情勢がとても変化してきています。日本も戦後は国連という枠組みによる国連中心外交で、それなりに平和を保ってこられたのかもしれないですが、これからの日本は、世界各国と平和構築のために、よりプロアクティブな役割を果たしていけるような国になっていったほうがいいと思います。

そのために、内閣府がバランスよくやっているこの青年国際交流事業は、新たな役割を果たしていくことができるのではないかという期待を感じます。こういった時代の転換点だからこそ、今まではまず世界と仲良くしましょう、世界に出ていきましょうでしたが、そうではなくて、今のこの戦後70数年の経験を経た日本がより世界を平和にしていく役割を果たしていけるように、青年たちが役割を担っていこうという方向性を引っ張っていけるようなプログラムになっていけるのではないかという期待を感じています。ぜひ応援もしていきたいです。それが将来の世界の平和につながっていくと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○梅宮構成員 4回にわたりお世話になりありがとうございました。先週、今週からアメリカの大学院に留学をするということで本学卒業生が挨拶に来てくれたのですが、彼も船事業の卒業生でこの検討会の議事録を見ていると言っていました。自分に大きなインパクトを与えてくれた事業なのでその後どうなっていくのかが気になって検索をかけて検討会があると知って見ているとのことでした。彼は卒業した後に中高の英語の先生になり、ずっとグローバル教育を担当し国際共修を展開している方ですが、今回フルブライト奨学金を得てアメリカの大学院に教育リーダーシップを勉強しに行くことになっています。彼も、いつか戻ってきた時に、直接船事業になのか、それ以外の活動になのかは分からないけれども自分が受けた恩を返すような形で貢献していきたいということを言っていました。

1つは、そういった貢献や恩を返したいと思っている既参加者は多く、そういった方々にこちらからアプローチできるとむしろ喜んでいろいろやりたいと思っている方がおられるのではと思いました。

もう1つは、彼は中高の先生なので良い例ですが、彼を通じて事業のインパクトがさらに次の世代に伝わっているということで、インパクトは長期にわたって発現していくものだと思います。すぐ翌年何かインパクトがあることもあるかもしれませんが、長い目でインパクトを捉えていく必要があ

り、手間がかかりますが、丁寧に拾い上げてそれを伝えていくことで事業の意義がさらに多くの人に伝わっていくと思いました。特に大きな事業ですので関係機関との折衝は大変なことだとは思いますが御検討いただけるとありがたいと私も思っております。

○山本構成員 私も卒業生として、このような形で関わることができて本当に光栄な機会だったと思います。大変勉強になることもたくさんあって、素晴らしい時間をいただいたと思っております。

梅宮構成員のお話を聞いて思いましたが、私の高校の英語の先生も「東南アジア青年の船」事業出身で、私の夫の高校の英語の先生もこの事業出身だったという話があるぐらい、20年、30年、40年経つと、世代が変わっても、その人たちが持っているビジョンや世界に対しての貢献の仕方が、お仕事だったり、ボランティアだったり、いろんなところに花が開いているということが素晴らしいことだと思っております。

私の世代の同期も10年経って。世界中で駐在したり、JICAにいたり、国連にいたり、スタートアップと立ち上げたりと進んでいっている人たちがたくさんいる事業だと思うので、そのインパクトを強く伝えて、かつ、このプログラムの価値が40年後にこれがあったおかげで国が守られたみたいな話ではないですけど、それぐらいの大きな看板を背負っている事業だということがちゃんと伝わるような機会になると嬉しいと心から思っているところです。

一方で、10年経って、話を聞いていると、例えば、選考倍率の課題だったり、募集の課題だったり、あと社会人を巻き込む施策は、乗り越えられない壁があると気づいたポイントです。そこは今後の変化ポイントとして、予算の話も、巻き込み方も、今までやったことのないチャレンジをしながら、その壁も乗り越えていけるような事業になっていくと嬉しいと思っています。

このような機会をいただけて、私も自分で喋っていて、自分が解決しに行きたくなくなったという前向きな心になったので、ぜひ、アルムナイの皆さんも巻き込んでいただけると、大きなうねりになると思うので、ぜひこれからも貢献できるように何か頑張っていきたいと思います。お話の中で出てきたところが、次の5年後、10年後のプログラムに生かされていることを祈って、私も応援したいと思っていますので、引き続きよろしくお願いします。ありがとうございました。

○白木オブザーバー 全4回の検討会に参加させていただいて、本当にたくさん大きな学びをさせていただきました。20年にわたって内閣府事業の事後活動をやってきましたが、私なりに次世代グローバルリーダーをどうやって育成するのか、内閣府事業や事後活動の価値はどこにつながっているのかをまとめた資料（資料3）を作りました。

我々はこの事業を「ライフチェンジング・エクスペリエンス」として捉えており、人生をかけて取り組みたい動機の獲得やコンピテンシーの変容が重要と思っています。そして、その土台になるのは、チャレンジャーとなる、世界・日本の社会や自分の人生に希望と自信を持つ若者たちをどうやって育むのかという点であり、そこに本質的な価値があると思っています。そのためには、個人単位の成長に完全に委ねるのではなくて、循環しながら育ち合う生態系みたいなものが必要というのが、私の中での結論です。本物や本質に触れ、ロールモデルと出会い、多様な人々との間で本音の対話をする機会を、そして、何者でもない若い時期に世界の人たちと語り合う機会を設けることは、大きな感動を

生むと思っています。しかし、その感動を実際に人生に生かし、自分のミッションを軸に仕事を選ぶことには非常に大きな壁があります。世界に対して問いを投げられるようなキャリアを歩んでいくには、10代や20代の一度の経験だけでは足りず、継続的な成長の機会が必要です。そのため、私としては、国や自治体のいろんなプログラムの架け橋となり、アルムナイ同士が連携しながら協働や新たな価値の創造を実現するプラットフォームとして活動していきたいと思いました。皆さんの周りでもし内閣府事業の参加者がいた時には温かく御支援いただければ嬉しいと思います。IYE0の会長としてオブザーバー参加させていただきました。ありがとうございました。以上でございます。

○南島座長 一巡いたしましたので、私からも一言申し上げさせていただきます。今日の一番大きいお話は、やはり平和構築・予防外交であったと思います。これが、私が技術的に困ったと思っているお話が1つありまして、すでに、人材やネットワークの価値ということで、人材育成価値、ネットワーク価値の最大化ということを言っていて、価値というかなり強い言葉の上の表現があるのか、ここが悩ましいと思っておりました。平和構築・予防外交というのは、もうワンランク上の規範の話と思いますが、ある意味、前提としていることを言語化がどこまでできるのかは1つのチャレンジと思っております。いずれにしても、ここはお預かりをさせていただければと思っております。

それから、2つ目に、白木オブザーバーから御提言いただいたことはしっかり届いております、IYE0と内閣府の関係を踏み込んで、会長としての思いもおありになって御発言いただいていたと思います。大変大事なご指摘をいただいていると、受け止めております。報告書ですので、どこまで書けるのかということと、外側から内部の話のように見えるところもありますので、その線引きをどうするのかは難しそうな気もしますが、いずれにしても、極めて大事な今後の課題を御指摘いただいたと思っております。

もう1点、内閣府の青年国際交流事業にはかなりのブランド力があって、そのブランド力があるがゆえに、参加青年がおんぶに抱っこで参加してしまうところがあるのは、盲点でした。それをどうやって、積極性や成長に転換していくのかは、実はかなり重要な論点だったと思っております。御指摘をいただきまして、誠にありがとうございました。

この3つは、最終回になってから学びましたが、もっと早くに、しっかりと認識をしておくべきだったと思った点でございました。本日の大きな学びであったと思っております。そこに今回の4回分の議論が辿り着けたということは、真剣に御発言いただいた中で、つかみ取ることができた大きな論点だったと思っております。お付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

最後に、まとめになりますが、水野統括官から一言いただけますでしょうか。

○水野統括官 内閣府の政策統括官をしております水野でございます。南島座長をはじめ、構成員の皆様におかれましては、4月から4回にわたり、毎月1回、内閣府青年国際交流事業の在り方につきまして、専門的な知見あるいは豊富な御経験に基づいて、大変貴重な御意見を賜りました。心より御礼を申し上げます。また、今日も長時間にわたり、熱心に御議論いただきまして、本当にありがとうございました。

私個人としても勉強になりました。この検討会では、船事業の在り方をはじめ、事業目的の実現に

向けた取組、持続性向上のための基盤整備など、多岐にわたる論点につきまして、御議論いただきました。とりまとめいただいた報告書は、今後の事業の方向性を示す大変重要な提言であると受け止めてございます。内閣府といたしましては、この検討会での御議論、それからとりまとめの内容を真摯に受け止め、今後の制度設計や事業運営にしっかりと反映させてまいりたいと考えています。また、事業を通じて育まれる人的ネットワークや、既参加青年の活躍がさらに広がるように努めてまいりたいと考えてございます。

結びになりますが、改めまして、構成員及びオブザーバーの皆様に深く感謝申し上げます。今後とも内閣府青年国際交流事業への変わらぬ御理解、御支援、御協力をお願い申し上げます。私からの挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

○南島座長 ありがとうございました。最後に事務局から事務連絡をお願いいたします。

○野木参事官補佐 南島座長、ありがとうございました。また、構成員及びオブザーバーの皆様、4回にわたって大変貴重な御議論、御意見をいただきまして、どうもありがとうございました。本日の会議資料については、内閣府ウェブサイトにて後ほど公表いたします。議事録については、後日、各構成員及びオブザーバーの皆様のご確認をいただいた後、内閣府ウェブサイトにて公表いたします。また、報告書については、本日いただいた御意見を踏まえて、事務局にて座長と御相談しつつ、加筆修正を行い、また構成員の皆様に御確認をいただきまして、最終的なとりまとめとさせていただければと思っております。事務局からは以上です。

○南島座長 それでは、内閣府青年国際交流事業の在り方検討会を終了させていただきたいと思えます。皆様、本当にどうもありがとうございました。